4月分市況報告書　　報告者　中島良晴

調査日　群馬県森林組合連合会共販所　4月2日

いよいよ新しい年度が始まった。県森連で年度初めの市である。
しかし市の内容はと見れば、前回にもまして出荷量が少ない。
出荷者も、大方二つの森林組合と一生産業者で占められている。
赤城南麓森林組合と鏑川東部森林組合である。
赤城南麓森林組合のスギの出荷は珍しい。 主に大径木の出荷だが、瑕疵も多そうだ。
鏑川東部森林組合の出荷は、大桁山からの出荷だそうで、主に3.0m材である。
市に掛かった椪を本数で見てみると。赤城南麓の材は、大径木なので1本～数本
で椪積されていて、件数が多く、総材積では、90 ㎥ ほど、対して鏑川東部は
3.0m材なので材積は少ないがまとまった椪が出来ており、こちらは 55 ㎥ くらいの出荷だ。
市の全体で 210 ㎥ 足らずなので、この二組合の出荷でも 70％ 近くを占めている。
ただ この二組合にしても、出荷内容から見て、主力の事業では無いように見える。
確かに森林組合の多くは、年度末の決算で締めくくりをしなければならない時期である。
ドンドン出荷している場合ではない。 国有林に至っては人事の移動もあり、新年度には
1から事業を組立て、林産事業を発注出来るようになるのは初夏の頃になるだろう。
県有林でも木材販売について、新たな取り組みを模索しているところだろう。
ならば木材生産業者はどうか？
国有林の仕事も一段落し、自社の持山を出荷するのには、時季的にもちょうど良いはず
なのだが、こちらも出てこない。 こちらは木材販売のプロなので、状況が見えている様だ。
今 原木価格はさほどに悪くないが、極端な品薄の為で、住宅着工数が増えている訳では
無いので、出荷が増えればたちまち値が下がる。と見て様子見をしているのではないか？
また今 出荷を始めれば、虫害の季節にも掛かってしまう。 山に木を立てて置く分には
虫害の心配はないので、急いで伐る必要はない。
今回の市の内容を見れば、相変わらず応札枚数は多く、5枚･6枚と人気のある椪もある。
今回は出荷者数が限られ、指標になる椪が少なくはっきりとは見えないが、価格は総体的に
少し減速を始めたように見える。 買い方は桜が満開になるのを見て、そろそろ新しく買った
材から先に使わなければならない季節になる事を考え始めている。
今ある材は虫害のリスクが低いので、秋まで温存するのだ。
入札価格は頭打ちだが、応札枚数が多いのは今の材を少しでも多く在庫したいと言う現れだ。
在庫では無く、生産した製品が、どんどん売れていれば、応札枚数だけでなく、価格も上がる筈
である。 市の最後には、インボイス･24年問題などで事務が煩雑になり、運賃が高くなるなど
ここ1～2年に起きた変化についての苦しさが吹き出していた。 トラックドライバーに至っては、
高額な収入の道が断たれ、運送会社は貴重な人材が確保できなくなっているという。
木材に限らず日本の物流の90％を支えてきたトラック輸送が姿を変えようとしている。
輸入木材の脅威が減少した今でも、大型の木材加工会社は港近くにあり、内陸である
本県の木材がトラック輸送によって、全国の大型工場に届けられた時代は、思いの外
早く壁にぶつかり、木材の長距離輸送は減少している。

調査日　素材生産協同組合　4月7日

こちらの市でも今年度最初の市という事だが、やはり出荷は少ない。
とは言え、出荷者の背景が違うので市の景色も少し違う。 請負仕事が多いという事か。
椪数は少ない。 単に出荷調整とか様子見と言うだけでは無い様である。
新たな伐採を始めるにあたり、周囲の山の境界確認と同意書が求められるとのこと。
九州で起こった誤伐･盗伐問題が起因しているらしい。 毎回国土調査の立ち合いを
している様な手間だそうで、新規に素材生産を始めるのに時間がかかりそうだ。
広葉樹についてはほとんどが売れ残りの様だ。 全部合わせても 7.053㎥で14椪中で
4椪が落札された。 どれも薪よりも安いくらいの価格だが、売れないよりは良しという事か
針葉樹も前半の 14椪は売れ残りである。 前々回の市でも並んでいた物件である。
杉の太物と青カビが入った赤松が3椪売れているが、後は薪の様な値段で、こちらも
”売れないよりはまし”と言った程である。 ヒマラヤスギ(アトラスシーダー)に至っては
50cm～58cmの太さでも45年生ほどの木である。 最近の技術をもってすれば利用価値
を見出せるかもしれないが、今の所は使おうと考える人はいない代物だ。
次に続く33椪は、まとまった数量になっていて、市場の程をなしている。
買い方も、今回はこの33椪しか見ていなかっただろう。これだけで 660 ㎥ ある。
こちらの市場は、明細書が出来上がった後も、市日の当日は午前中まで椪積を続ける。
従って 数量の訂正が付き物なのだが、最近は入荷が少なくて訂正と言っても、ほんの
少しだけ或いは訂正なし、つまり早々と椪積作業が完了してしまっていた回もあった。
今回は訂正が多いので、今日の午前中まで積み足していたのだろう。
この点で県森連よりは入荷が多い。 素材生産業と森林組合の違いが表れた部分か？
価格につては、やはり減速している様だ。 スギとヒノキの 4.0m中目材はまだ好調を
保っている様だが。 3.0mははっきり減速している様だ。 これは買い方も 4.0m を高く維持
する努力をしている様だ。 特に 4.0m の製材品が高く売れている訳ではない。
4.0m も一緒に値が下がると、一時極端に3.0m造材に偏った事があったがこれの再来を
嫌っての事だ。「4.0m と 3.0m の価格差は維持しなければならない。」 と言う声が
聞こえた。 今日の売り払い物件の、後半33椪の売れ方を見ると、やはり応札枚数は
多く、競争があったことが伺える。 但し落札価格を見ると減速の兆候が見え、従って
2番札･3番札も数字は競っていたものと推測できる。 競っていたと言えば景気が良いが
つまり 誰もが同じ様な値段しか付けられない状態だが、今の時季の丸太は在庫に欲しい。
丸太を買ってもすぐに売れるほど製材品市場は動きが無いが、すぐに丸太が日持ちが
しない時季が来る。 次回位からは、買った丸太をすぐに製材しなければならない。だろう。
夏が過ぎるまで、温存できる丸太が欲しい。 売る当てはないけれど、持っていないと困る。
という思惑が今の原木市場の形を作っている様だ。

今回 「ヒマラヤ杉の様な材でも新しい技術で使えるかもしれない。」 と書いたが
例えば スギの圧縮材などがある。 スギの赤身の部分だけを3.0cm厚ほどの板目材に作る。
これを加熱しながら、2.5cm位まで圧縮するという。 ポイントは**赤身である**事･**板目である**事だ。
ただ単に圧縮をすれば、木材の組織が潰れてしまうだけで使い物にはならないが、
赤みの部分には”リグニン”と言う樹脂が溜まっている。これを加熱しながら圧縮する事で
硬い杉板ができる。 昨年の理事研修会で川場村役場を見たが、ここにもたくさん使ってあった。
板目なのは、圧縮し易い様にという事で、正目では圧縮方向に年輪が立ってしまうので
向かないそうだ。 これによりスギでも傷が付かないフローリングが作れる技術だ。